

## 「意欲・関心・態度」と絶対評価

## '09年度 塾生1学期通知表結果

9科目別平均	英語	数学	国語	社会	理科	5科目計	音楽	美術	保体	技家	9科目計	
学年	1	4.6	4.6	4.1	4.2	4.2	<b>21.6</b>	3.4	3.5	3.8	3.8	<b>36.2</b>
	2	4.7	5.0	4.3	4.6	4.4	<b>23.0</b>	3.4	3.7	3.4	3.7	<b>37.3</b>
	3	4.4	4.6	4.3	4.4	4.4	<b>22.0</b>	3.6	3.6	4.0	4.1	<b>37.4</b>

## 塾生5科目別内申評定割合 (%)

	英語	数学	国語	社会	理科
5	<b>67</b>	<b>73</b>	30	45	42
4	<b>21</b>	<b>24</b>	55	42	42
3	<b>12</b>	<b>3</b>	15	12	15
2	<b>0</b>	<b>0</b>	0	0	0
1	<b>0</b>	<b>0</b>	0	0	0

## 塾生9科目合計内申割合 (%)

	'09	'08	'07	'06
40~45	<b>33</b>	38	20	20
36~39	<b>27</b>	21	37	36
32~35	<b>27</b>	28	27	24
27~31	<b>12</b>	14	17	16
9~26	<b>0</b>	0	4	4

今年度初めての通知表が出ました。充分良い結果のように見えますが、私としては決して満足のものではありません。なぜならば、今年の塾生は定期テスト結果に比べて通知表評定の悪かった人がかなりたくさんいたからです。

定期テスト終了後、学校からの分布表が出ると、それをもとに私は一人一人の塾生に対して科目ごとに相対評価で「5」「4」「3」「2」「1」の評定を割り出します。テストの点数が上から10%以内ならば「5」、30%以内ならば「4」、70%以内ならば「3」という具合です。この評定のつけ方は、7年前まで愛知県で取り入れられていた相対評価法です。

それに比べて今は絶対評価法です。その教科の能力に加えて、「意欲、関心、態度」という、本来ならば数字に表せない観点までも評定の要素になります。これが要注意です。学校での「態度」によって私の計算外の評定をいただってくることとなります。今回1,2年生26人中9人の塾生(34.6%)が計算より低い評定をとってきました。たとえば、高森1年生において、中間・期末で、ある教科100点・97点と取り、相対的には計算上完全に「5」のはずなのに、「4」だった塾生が二人、また、100点・95点と取ったのに「3」だった塾生が三人。そうかと思えば逆に、92点・93点だったのに「5」だった塾生が一人。もちろん同じ先生です。その授業は聞くところによるとかなり騒々しいらしいのですが、その先生はおかまいなしに授業を進めるといいます。もちろん真面目に受けていない生徒が悪いのですが、これではまるで通知表を下げることで生徒に自分の悪い所に気づかせ、態度を改めさせようとしているかのように思えます。

学校が荒れてくるにしたがって、通知表評定(内申点)で生徒を管理しようとする動きが強まってくるのではないかと心配しています。